

転勤は最大の研修

2020.9.25

転勤というと、どちらかといえば、マイナスのイメージがあるかもしれない。その人、そのときそのときの状況によるのはもちろんだが。「転勤は最大の研修」という言葉がある。今までの教員人生を振り返ると、まさにその通りだと思う。

私の転勤人生は、初任の玉川村立玉川第一小学校のときの「玉川村ってどこ？」から始まった。村の学校のため、てっきりへき地だと思っていた私は、1年目の11月下旬の人事異動希望書を書く時期になって初めて、自分の学校がへき地ではないことを知った。まわりの先生に「なんで村なのにへき地じゃないんですか」と聞いてみたところ、「だって水郡線の駅があるでしょ」という答えだった。確かに無人駅がある。「そういうものか」とがっかりしたものである。「せっかく村まで来たのにへき地じゃないのか」このへき地ではないという現実が後々まで影響することになる。

3年目の11月下旬に、人事異動希望書を出した。だが、結果はあろうことか中学校への異動となった。小学校から中学校へ、小学生から中学3年生へ、全教科担当から国語科専門へと、これほどの研修はないではないか。しびれるほどの展開だった。

転勤した中学校の1年目が大きかったと思う。毎日毎日「授業ができるだろうか」という不安と闘いながら国語の勉強をしていった。当時のその中学校は生徒数1000人に迫る大規模校で先生方も60人ほどいた。どうにかこうにか3年間を過ごし、4年目、5年目、6年目と研修主任というポジションをさせていただいた。これも大いに勉強になった。校内研究、共同研究、教育論文等に関する書籍を読んだ。この3年間で、自分だけではなく、先生方を巻き込みながら授業を改善していくダイナミックな営みを知ることとなった。

2校目を経験し、へき地に行かなければならないシステムだったので、当然のごとく次はへき地に行こうと考え希望を出した。しかし結果は、当時最も荒れた学校として有名だった、ある中学校への内示をいただくこととなった。さすがの私も抵抗したくなった。「行きたくない」とは言えないので、校長先生に「妻が〇〇小学校に勤務しているのだから、私がすぐそばの△△中学校に転勤するのはおかしいと思います」ということを主張した。校長先生は「そうだな。わかった。言ってみる」と言ってくくださった。淡い期待を抱いた私であったが、翌日の校長先生からのお話は「だめだそうだ」というあっけないものだった。

内示が出てから離任式を迎えるまでの期間、私の心は荒れていた。頭にはくるが、怒りのやり場がない状態だった。また同時に「逃げ出したい」「行きたくない」という思いが日に日に大きくなっていった。異動が発表になり、しぶしぶと△△中学校に電話をしたところ、「すぐに来て」というではないか。仕方なくわざわざ高速道路を使い、△△中学校の校長室にはせ参じた。すると、校長先生から「予定通り、生徒指導主事だから」と言われた。わかってはいたことなのだが、「はい、わかりました」と、無駄な抵抗は一切しなかった。この状況からも、△△中学校の生徒指導主事がいかに特別なポジションなのかは、容易に想像することができた。

ぶすくれた（ふてくされるの意）まま2校目の□□中学校を後にした私は、4月1日に仕方なく△△中学校に赴くのであった。

(次号に続く)